



野鳥の 不思議解明 最前線 #109 文 植田睦之

© Japan Bird Research Association, 2014

水を張ったばかりの水田にやってきたセイタカシギ。彼らも遠くから水を張ったことを感知することができる？ 撮影●渡辺美郎

遠方で起きていることがわかる？

～ 数百キロ先の塩湖をみつけるムネアカセイタカシギ～

ジョウビタキやツグミの渡来もはじまり、寒くなってきました。そろそろ冬の調査の準備をせねば、と、ワックスを塗るために Sorel のスノーブーツを押し入れから取り出しました。すると靴の中には、なぜか電子書籍リーダーが…。春から見当たらず、どこを探して出てこなくて、困っていたんですね。以前も本に挟んだまま本棚にしまっただけで、しばらく見当たらずになっていたことがありました。自分が無造作にしたことなんですが、予測不可能な場所にいつか見つけたものを見つけるのは、よっぽど嗅覚が発達している人でないと無理ですね。

でも、鳥にはそんな能力を持っているものがあります。砂漠に不定期に出現する湿地を利用する鳥たちです。オーストラリアの砂漠地帯には豪雨が降った時にだけできる塩湖があります。出現する時期も場所も決まっていない、予測不可能なそんな塩湖を利用する水鳥がオーストラリアには何種もいて、ムネアカセイタカシギ *Cladorhynchus leucocephalus* もその1つです。彼らは、どうやって塩湖をみつけるのでしょうか？ オーストラリアの Pedler さんたちのチームは 21 羽の鳥に衛星用の発信機を付けて、その動きを追跡してみました。

セイタカシギは、海岸などにある湿地で普段は生活していますが、砂漠に豪雨が降って 2 週間ほど経った日、彼らは海岸の湿地を旅立ちました。そして約 400km 程も離れた内陸の塩湖に滞在し、いくつかの塩湖を巡った後に、再び、同じ海岸の湿地に戻

りました。その移動距離は長いものでは 2,000km を越えました。衛星用の発信機での追跡では、衛星が上空を通過した時にしか位置がわからないので、鳥の動きの断片しかわかりません。それでもセイタカシギは一直線に目的地の湿地に向かって飛んでいるように見えます。いったいどうやってその湿地の場所がわかるのでしょうか？

現在までのところ、その方法はわかっていません。しかし、鳥には低周波の音や温度や気圧の勾配から遠くの豪雨を感知できると考えられているので、そうしたものを使って大まかなタイミングや方向を計っているのかもしれませんが、それだけでは実際の塩湖の場所はわからないし、降雨からセイタカシギが飛立つまでに時差があったことから、Pedler さんたちは塩湖あるいはそこに発生する食物（プランクトン？）の匂いをたよりに塩湖を見つけているのではないかと考えています。ウミツバメがプランクトンの匂いを遠方から感知できるという研究もあるので、その可能性も否定できませんが、さすがに数百キロも離れた場所から感知できるかという…。嗅覚細胞の数など調べたら、可能性があるかどうか見えてくるかもしれません。鳥にはまだまだ謎の能力が多いですね。

紹介した論文

Pedler RD, Ribot RFH & Bennett ATD (2014) Extreme nomadism in desert waterbirds : flights of the banded stilt. *Biology Letters* 10(10): 20140547.